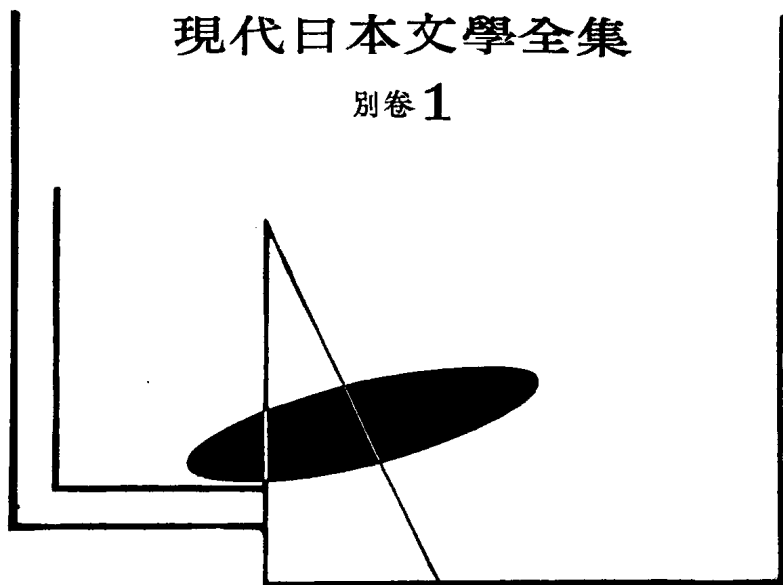


現代日本文學史

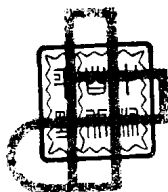
現代日本文學全集

別卷 1



筑 摩 書 房 版

現代日本文學全集 別卷 1



現代日本文學史

昭和三十四年四月二十五日 印刷
昭和三十四年四月三十日 發行

著者

中^{なか}村^{むら}光^{みつ}
白^{しろ}井^い吉^{よし}
平^{ひら}野^の謙^{けん}見^{けん}夫^みお

發行者

東京都千代田區神田小川町二ノ八
古田 晁

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山田 一雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑摩書房

〔電話〕東京二九局(29)七六五二(代表)
〔振替〕東京 一六五七六八

整版 株式會社 精興社
印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 高陽堂

現代日本文學史 目次

明治

中村光夫

序

第一章 明治初期

第一節 戯作

第二節 啓蒙思想

第三節 漢學者の戯文

第四節 政治小説

第五節 翻譯小説

第二章 明治中期

第一節 逍遙、二葉亭

第二節 紅葉、露伴

第三節 『しがらみ草紙』

第四節 評論の時代

第五節 明治二十年代の意味

第六節	明治三十年代の特質	三〇
第七節	『文學界』	三一
第八節	小説の新風	三二
第九節	小説の擴大	三九
第三章	明治末期	一六
第一節	「自然」の觀念の變遷	一八
第二節	島崎藤村	二三
第三節	田山花袋	二七
第四節	岩野泡鳴	二三
第五節	徳田秋聲	二五
第六節	夏目漱石	二九
第七節	森 鷗外	三〇
第八節	白鳥、青果、秋江	三〇
第九節	荷風、潤一郎	三〇
大 正		
序		一五
第一章	大正前期	一五
	白 井 吉 見	一五

昭和

平野謙

三〇五

序

三〇六

第一章 昭和初年代

三〇

第一節 芥川龍之介の死

三〇

第二節 マルクス主義文學の成立

三九

第三節 新興藝術派の結成

三九

第一節 二つの事件

一五

第二節 『スバル』『白樺』『近代思想』

一七〇

第三節 觀潮樓と漱石山房

二〇五

第四節 自然主義のひとびと

二一六

第二章 大正後期

二四三

第一節 「新しき村」と「有島共生農園」

二四三

第二節 『新思潮』『三田文學』『奇蹟』のひとびと

二五三

第三節 心境小説と通俗小説

二七五

第四節 『文藝戦線』と『文藝時代』

二八二

第五節 二つの事件

二九六

第四節	既成文學の衰弱	三二
第二章	昭和十年前後	三七
第一節	マルクス主義文學の崩壊	三七
第二節	既成文學の復活	三九
第三節	不安の文學と文藝復興期の意味	四〇
第三章	昭和十年代	四一
第一節	日華戰爭下の文學	四一
第二節	太平洋戰爭下の文學	四六
第四章	昭和二十年代	四六
第一節	占領下の文學	四六
第二節	マス・コミュニケーション下の文學	四七

現代日本文學史

明

治

中

村

光

夫

序

明治文學をふりかえるとき、僕等はいつもある不思議な錯覺におち入ります。これは長い期間のあいだに自然とできあがつたもので、今では大多數の人々にあたりまえのこととして、うけ入れられています。

明治十年、あるいは二十年が、同じ年を西暦で現わした一八七七年、あるいは八七年にくらべて、ひどく遠い過去に感じられることですが、この一見ささいな喰い違いに、明治時代の大きな特質がかくれているように思われます。

明治という時代は、一口に言えば、西洋の影響で、我國の社會全體が大きく變つた時代であり、明治文學の歴史も、他の文化のあらゆる分野と同様に、西洋文學の影響を中心にして展開します。

ところが十九世紀後半の西洋文學を、これと同じころの明治文學に比較して見ると、前者のなかには、まだ僕等の日常の讀書の範圍に這入るものが多いのに、後者には時代を隔てた遺物という感じが強いのです。

明治維新は一八六八年にあたりますが、この翌年の六九年にはフロオベールが「感情教育」を發表しています。「ボヴァリイ夫人」の刊行はさらにそれから十餘年前の一八五七年で、我國

の安政四年にあたります。ちょうどペリーが浦賀にきてから五年後です。この年にボオドレールが「惡の華」を出版したのですが、このころ僕等の先祖は齧をゆつて刀をさしていたのです。二葉亭が「浮雲」を完成できずに終つたのは一八八九年であり、鷗外の「舞姫」は、一八九〇年の發表ですが、このころはもう世紀末の風潮のなかから、二十世紀が頭をもたげてきた時代で、アナトール・フランスは「タイス」を、ポール・ブールジェは「弟子」を書き、ジイドやヴァレリーの仕事もはじまりかけていました。マラルメやヴェルレーヌもその重要な仕事を完成していました。

イギリスでも、ワイルド、ハーディ、メレディスなどの成熟期はこのころであり、ドイツではニーチェがすでに發狂し、ハウプトマンが處女作を發表していました。

トルストイが「戦争と平和」を書いたのは、明治維新前後であり、「アンナ・カレーニナ」の完成は、西南戦争のころにあたるというのは、ドストエフスキの最後の小説「カラマーゾフ兄弟」が明治十三年（一八八〇年）に書きあげられたというのと同様、僕等の頭のなかの年代記に衝撃をあたえずにおきません。（ついでに云うと、ドストエフスキが「貧しき人々」を發表したのは、弘化三年（一八四六年）のことであり、シベリヤに流されたのは、嘉永三年（一八五〇年）、「罪と罰」を書きあげたのは、慶應二年（一八六六年）です。）

外國の過去の方が、本来なら、ずっと親しい筈な自國のより近く感じられるのは相手の國の歴史にたいする無知によることでもあります。しかしこの場合はそれよりも僕等の經た過去の文

化の特異な性格によるものと思われまゝ。

現代のフランス人に二つの大戦をへだてた十九世紀がどんなに異質の過去に見えようと、ひと通りの教育をおえた者なら、ビエル・ロチやモウパッサンの文章を読んで意味をとることは誰でも問題なくできます。

我國では「舞姫」は云うまでもなく、それと同時代の紅葉、露伴の作品、あるいは時代から云えばさらに新しい一葉の小説など、高校を卒えた人にでも、「勉強」の対象としてでなければ讀めない古典になつています。

こういう激しい推移を見せたのは、たんに小説の表現形式や文體だけでなく、文學の概念そのもの、あるいは社會の風俗、人々の思想までが、おそらく他の國に例をみないはげしい變遷を経ていたので、明治文化の性格を捕えるには、まずこの變化の姿をよく見究めねばならないのです。

世代という言葉が一時さかんに使われました。これはゼネレーションという英語の譯ですが、ゼネレーションというのは、元來が子供を生むという意味から轉じて來た言葉で、世代という觀念も親の代と子の代というのが基本になつています。

人が生れてから成人するまでを、ほぼ三十年、成人してから活動の期間をやはり三十年とし、これを親子の交替に要する年數とみるのです。

一世代というのは、ヨーロッパでは三十年のことで、チボオデが十九世紀のフランス文學を世代別に論述したときも、これを一七八九年の世代から一九一四年の世代まで、つまり大革命

の發端から第一次大戦の勃發まで百二十五年間を、ほぼ三十年ずつにわけています。

それが我國に這入ると、世代という考えはほぼ十年をひと區切りにするようになり、甚だしいのは、戦前派、戦中派、戦後派などという風に、五六年ごとに區切りを設けようという動きもあらわれました。

慌だしいのは、こういう議論をする人の頭の働きより、むしろ現實の時代の推移なのです。五つも齡がちがえば、もう話は通じないという顔をすることの當否は別問題として、そこにはたしかに思想や感情の色調の違いがあることは事實なのです。これがたんに戦争や敗戦というような特殊な環境にもとづく例外でないことは、明治以來の文學の流れも、ほぼ十年ごとに大きな屈曲にさしかかつているのもわかります。

我國では十年が一世代の變化に匹敵する、ということとは、比喩的に云えば、時間の流れが、外國の三倍の早さですぎ去ることです。

變化がこんな風に早すぎるといふのは、一方から考えると、それが必ず表面的に止まるのを意味します。そういう風にうけとめない限り、人間がそんな變化に堪えられるものではないからです。我々の子供も、實際に親に代るまでに育つには、三十年かかるのです。

慌だしすぎる變化は、したがつて、本當には變つていないといふことにもなるので、我國の近代文學の實質は、それに携る人が意識するほどは新しいものではないのです。徳川時代からの傳統、古いとして捨てられたさまざまな外國作家の思想など



明治初年の女學生風俗

が、おのおの新しさを自負した「世代」の作家たちのなかに生きています。

文學が——すべての文化と同じように——過去に支えられて生きる以上、傳統や外國の古い時代から養分をとり影響をうけるのは當然であり、必要でもありません。

しかし我國ではそれが多くの場合は意識されなかつたため、知らぬ間に作家にとりつた過去の亡靈は、彼が意識的には「新しさ」を求めてもがいているだけに、彼の文學を底の浅いものにしていきます。

これは他の面から見ると、彼等の「新しさ」はたんなる粧いであり外國から僕等がたえずうけてきた刺戟や影響は、目まぐるしいだけに表面的に止まつたということにもなります。

パイロンやディケンスの影響がそうであつたように、サルトルやカミュも通り一遍にうけとられて、やがて飽きられようと

しているのは、僕等が眼前に見る通りです。

明治時代の文學が、僕等にとつてすでに古典であるのは、それが僕等の生きている現實と切りはなされ、完成された文學作品であることを意味しません。それは一見したところ、僕等の生活から切りはなされ、そのために、生命の枯渇した作品にさえ見えます。

しかし現在の僕等の生活が、あらゆる面において明治時代をうけつぎ、その性格に影響されているように、明治文學は、そのあらゆる缺點を含めて、僕等の文學の骨格を形造つています。その特色をはつきり知つておくことは、今後の進路を考える上にも大切なのです。

「今の時代は物質的の革命によりて、その精神を奪はれつゝあるなり。その革命は内部に於て相容れざる分子の衝突より來りしにあらず。外部の刺戟に動かされて來りしものなり。革命にあらず、移動なり。人心自ら持重するところある能はず、知らず識らずこの移動の激浪に投じて、自から殺るさざるもの稀なり。……その事業その社交、その會話その言語、悉く移動の時代を證せざるものなし、斯の如くにして國民の精神は能くその發露者なる詩人を通じて、文學の上にあらはれ出でんや。」（『漫罵』）と北村透谷は明治二十六年（一八九三年）に云い、獨歩はそれから四年おくれ次のように云います。

「新日本を建立するに當りて、全く缺乏せる者は詩歌なりとす。開國以來海外の新思想は潮の如く浸入し來り、我國文明の性質著しく變化を被りしと雖も、遂に一詩歌の現はれて此際的情想を詠じ以て、吾人の記憶に存せしめたる者なし。……嗚呼詩歌

なき國民は必ず窒塞す。其血は腐り、其涙は濁らん。」(「獨歩吟」序)

彼が希望を托した「新體詩」が國民の「情想を詠ず」ることに失敗した現在、僕等の血が腐り、涙が濁っているかどうかは別としても透谷、獨歩の意味したような「詩人」が、これまでの我國に出現しなかつたことはたしかのようです。

明治文學史上、最初の藝術的意圖をもつて書かれた小説が「當世書生氣質」であるのは、いろいろな意味で興味深いことです。

これが今日から見て、文學作品といえるかどうかはさておき、少なくとも近代の文學者としての自覺にもとづいて書かれた小説であることはたしかであり、それゆえに明治の近代小説はこれから始まるとされるのですが、そこで材料にされているのが「書生」であるという事實は、文學の「改良」を志した逍遙の意圖とは別に、大きな意味を持つと思われまします。

我國の近代小説は、このころから現代まで知識階級の青年、つまり學生を主要な讀者として發展してきました。

知識階級によつて書かれ、知識階級によつて讀まれ、知識階級の思想や感情を主題とするという、近代文學の性格は、必ずしも我國だけのことではないかも知れません。しかし我國の知識階級が經た獨特の形成の過程と、他に類のない内面生活が、僕等の文學を、まったく獨自なものにしています。

明治維新が下級武士の手で行われた革命であることは、今日

では通説ですが、後世が志士と呼んだ革命の主動者たちは、當時の權力者であつた大名や門閥を誇る上士たちにくらべれば、新しい知識を身につけた青年たちであり、當時の言葉で云えば、「書生」であつたのです。

大隈重信は、「昔日譚」で、

「維新改革、王政復古の偉業は、必ず我中等以下の國民たる士族の手を待たざるを得ざりしなり」といつたあとで、その「士族」を説明して次のように云います。

「維新改革の原動力なりし士族とは果して如何なるものなりや……單に士族と言へば其數は至て多く、盡く維新改革の原動力を以て目す可からず。……自ら權力を振ひ藩政に當り、以て藩政を處理する重役なるか、將た其下に屬して其願使に任じ下情に通達すると稱する吏員なるか……否々、彼にもあらず、是にてもあらず、其天下に率先して改革の聲を擧げ、始終其聲を續けて以て雲霧を一掃するに至りしものは、皆一介の書生なりし。」

そして彼は、この書生を



明治初年の書生

支那學（所謂儒道）派、國學派、神道派の三つに分けていますが、ここに洋學派が這入っていないのは、面白いことで、維新の改革がまず復古運動の強い色彩をおびて行われた消息がそこに現われています。

福澤諭吉は、維新當時は、「今度の明治政府は古風一點張りの攘夷政府と思ひ込んで」いたといひます。

しかし尊王攘夷を標榜して政權を得た書生たちが、すぐ開國の方針をとつたのは、必ずしも外國の壓力に屈したためだけではありません。

彼等の多くは攘夷の實行のためにも、西洋の砲術を學ぶ必要をみとめて、これを實行した人々であり、外國艦隊との間にいくどか行われた小規模な實戰は、「斥攘の實功を擧げ」るために「先づ彼の長所を取り、理化學を修め、大砲を鑄造し、堅艦を製作する」のが、始めに考えたほど容易な仕事ではないことを證明するに充分でした。

西洋と日本とは社會の仕組みや、考えかたの根本にちがひがあり、武備や兵器の優秀性はその一面にすぎないことが明かになるにつれ、その「文明」にたいして、我國の現狀が未開あるいは野蠻と映つたのは、當然の論理であり、攘夷の熱情が、彼の「文明」を學ぼうとする熱意から「開國」に轉ずるのは、自然の成行でした。

「新しく外人に親炙し、地理、制度、歴史及び其他の事物に關する種々の書籍を輸入し、是を讀むに及んで、始めて彼國にも君臣あり、政府あり、其制度、法律、秩然として備はり、其宗教文物まで亦取るに足るものあるを覺れり」と大隈重信は云い

ます。

福澤諭吉はやはり幕末に外遊して、西洋諸國の政治制度と經濟の組織に驚異の念を抱いて、彼我の文化を比較し、「東洋になきものは、有形において數理學と、無形において獨立心と、この二點である」という結論を得ていますが、この二つの「文明の要素」を我國に移植するには、封建制度の打破が必然の前提でした。

維新の變革が下級武士の手で遂行されながら、結果において、資本主義の社會を生む近代革命の役割を果たしたのは、攘夷論者を開國に轉じさせたと同じ力が働いていたためと思われまふ。

どんな社會的變革も國內の條件が熟さねば、行われる筈がない以上、明治維新をたんに外國の影響によつて説明するのは危険でしょう。しかしその後の我國の進路を定める上に、西洋諸國が學ぶべき範例として強い感化を及ぼしたのは事實なのです。「富國強兵、最大多數の最大幸福の一段に至れば、東洋國は西洋國の下にをらなければならぬ。」と福澤は云います。「富國強兵」と「最大多數の最大幸福」とが、ほとんど同じ意味の言葉に使われたのは、當時の時代相の反映です。

二百年間の孤立のあとで、我國が始めて世界に眼をひらいたときが、あたかも十九世紀の後半であり、帝國主義の時代に入つた西歐諸國が「列強」として世界の中心をなしていたことは、明治の日本に大きな影響を及ぼさずにおかなかつたのです。

當時の指導者の大部分は、おそらく諭吉の云うように、「文明」に改宗したのちも、心底においては攘夷論者でした。

彼の希^{ねが}いは、結局眞に西洋諸國を打ち破るに足る「大砲を鑄造し、堅艦を製作する」ことでしたが、そのためには、みずからヨーロッパ化することで、その「文明」の跡を追うほかはないのを知っていました。

この國家としての「出世」を希う感情は、それが「上族」の生活感情にうまく調和したためもあつて、明治時代の指導階級を動かした支配的熱情といつてもよいのです。

やや極端な云いかたをすれば、彼等は國民の個々の生活の幸福は犠牲にしても、我國の國際的地位の向上を圖らねばならな^いと考へたので、それはちやうど、武士の家庭で主人の出世のために家族が犠牲を拂うのは當然と考へるに似ていました。

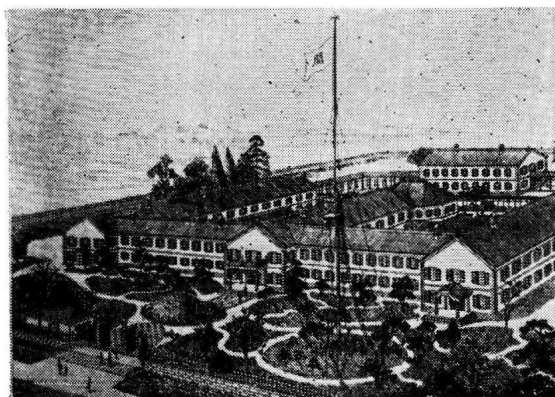
「富國強兵」と「最大多數の最大幸福」が矛盾したとき、後者は躊躇^{ちゆうちゆう}なく捨てられ、富國どころではなく「貧國強兵」が強行されたので、漱石は日露戦争後に、我國が軍備に追われる有様を「夜番の爲に正宗の名刀と南蠻鐵の具足を買ふべく餘儀なくされたる家族は、澤庵の尻尾を嚙つて日夜齧^{あぐせ}齧するにも拘らず、夜番の方では頻りに刀と具足の不足を訴へてゐる」と形容しています。

このような國際的な出世主義に、國內では知識階級の個人的出世主義が呼應したのですが、いずれにせよ、この明治時代の特質は、文學の性格を鮮かに彩つてゐるので、半世紀にわたる明治文學の歴史は、知識階級の社會で果す役割の變遷とともに、時代の性格にたいする彼等の反省と意識の深まりの過程と見られます。

明治政府の主腦自身が「書生」であつたのは前述の通りですが、彼等自身は西洋の學問を身につける機會も閑暇もなかつたので、開國の方針を決して、近代國家の建設にのりだした彼等が、まず求めたものは西洋の「文物」にかんする知識を持ち、時代の要求に應^{こた}え得る人材でした。

英語や蘭語を解し得る者は、それだけで、舊幕臣でも、初期の明治政府には重用されたので、洋學が一躍して、維新前の漢學や國學に代つて、知識階級の資格を形造る學問になつただけでなく、新しい學制の整備とともに、外人教師などが多量に雇われ、高等程度の學校の授業はほとんどすべて外國語で行われるというよう^な、現代でも考えられない、極端な歐化教育が行われました。

新教育の中心であつた開成學校（後の東京大學）が、幕府の蕃書取調所や醫學所の後身であつた事實が示すように、明治の書生の氣風は、或る點で、舊幕時代の洋學生のその延長でした。



明治6年開設の開成學校

この時代の代表的洋學塾であつた緒方洪庵の適塾に青年時代を送つた福澤諭吉は、當時の「書生氣質」を「自傳」のなかで活寫しています。

漢學塾と洋學塾のちがいは、まず前者が形式を重んじ、學塾が同時に禮儀の修練所であつたに對して、後者がそうした生活の外見にまつたくだわらなかつたことで、

「塾風は不規則といはんか不整頓といはんか、亂暴狼藉まるで物事に無頓着。その無頓着の極は世間でいふやうな潔不潔、きかないといふことを氣にとめない。」と福澤は云つていますが、こういう「不整頓」と「無頓着」を、學生の特權として喜ぶ氣風は、時代とともに薄れながら現代までつづいています。

彼等の風態は、夏はじゅばんもふんどしもつけぬ赤裸で、食事と會讀のとき「紹の羽織をまつばだかの上に着る」だけであり、冬は皆肌着に虱をわかし、「ちよいとはだかになれば五匹も十匹もとるに造作はない」という有様でした。

外出するときは、「往來の群集、なかんづく娘の子などは、アレ書生がきたといつてわきの方によける」ような風態で、盛り場などさかんに練り歩き、今日で云えば愚連隊に近い所行も、ときどきは演じたようです。

しかし、こういう不行儀な行動は、彼等の激しい勉學の意欲と少しも矛盾しなかつたので、

「およそかういふ風で、外に出てゐても内にゐても、亂暴もすれば議論もする。それゆゑちよと一目見たところでは……いかにも學問どころのことでなく、ただワイワイしてゐたのかと人が思ふであります、その一段にいたつては決してさうでない。

學問勉強といふことになつては、當時、世の中に緒方塾生の右に出る者はなからうと思はれる。」と福澤は云い、その一例として、自分は大阪にいる間、ほとんど本式に寝たことはなく、いつも讀書で徹夜して、假睡する程度で枕というものを持たぬくらいであつたが、これは自分が特に勉強家であつたからでなく、塾生はみなそうであつたといひ、こんな風に貧しい生活に堪えて、ひたすら勉強したのは、當時の大阪では蘭學を修めたところで別に衣食の道がひらけるということはなかつたから、いわば「目的なしの苦學」であつたが、「一步を進めて當時の書生の心の底をたたいて見れば、おのづから樂しみがあつた。これを一言すれば、——西洋日進の書を読むことは日本國中の人にできないことだ、自分たちの仲間に限つてこんなことができる。貧乏しても難澁しても、粗衣粗食一見みるかげもない貧書生でありながら、知力思想の活潑高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すといふ氣位」であつたと書いています。

ここに明治の「書生」あるいは知識階級の氣質はすでにはつきり現われています。

その特色を要約して云えば、まず、漢學教育の道德主義、形式主義にたいする反撥としての、放任主義、弊衣破帽主義であり、書生は社會一般の禮儀の埒外存在であることが、一般にみとめられました。

第二は、これと表裏する徹底的な知育中心主義で、要するに教育の眼目は、西洋の書物の内容をよく理解して、これを我國に應用する才能を育てることであり、あらゆる分野にわたる一種の技術者養成を目的としていました。